

### 三 先駆者たち

「ユートピア」社会主義の内には、社会の構造更新を目ざし、しかもプロレタリア独裁国家「死滅」後のいつかわからぬ将来に達成される更新ではなく、いまこの場で、いまこの場の与えられた条件の下で開始する更新を目ざすところの有機的・建設的な、有機的・計画的な要素が存在することを私は指摘した。それが正しいとすれば次にはこの「ユートピア」社会主義の歴史においてこの要素がたどってきた発展の道筋が示されなければならない。

「ユートピア」社会主義の歴史には、それぞれ特殊の仕方でも世代的に結びつく、活動的な思想家の三つの対がきわ立っている。サン・シモンとフーリエ、オウエンとブルードン、クロポトキンとランダウアーである。この中間の対のまん中に、高度資本主義への過渡期に対応する社会主義の第一段階を、高度資本主義の発足にともなう第二段階から分離し決定的な裂け目が貫いている。第一の段階では、めいめいの思想家が独自の建設的な思想を寄与し、それらの思想は初めは互いに未知で近づきえないままに並存したが、第二段階では、ブルードンとその後継者たちによって包括的な総合、構造的更新という総合的な理念がづくりあげられた。そ

れぞれの段階が他と取りかえることのできない地位を占めているのである。

それら世代間の関係を明らかにするため、二三の数字が重要でなくてはならないであろう。サン・シモン（一七六〇年）はフーリエ（一七七二）より十二年前に生れ、そして十二年前に死んだ。けれども彼らは、フランス革命前に生れ、一八四八年前に死んだ同じ世代に属している。——もっとも、若い方のフーリエは本質的タイプからして十八世紀の人であり、年長のサン・シモンは十九世紀の人であった。オウエン（一七五一年）は革命前に生れ、ブルードン（一八〇九年）はナポレオン勝利の時代に生れた。かくて彼らは出生からすれば、異なる世代に属するが、ともに一八四八年と一八七〇年の間に死んでいるため、死は改めて彼らを一つの世代に結びつけた。同様のことは一八四八年前に生れたクロポトキン（一八四二年）と一八七〇年に生れたランダウアー（一八七〇年）についてもいえる。二人とも第一次大戦後間もなく死んだのである。

サン・シモンについて、科学としての社会学の建設者ローレンツ・フォン・シュタインは正當に、社会（すなわち国家と異なる社会そのもの）を「初めてその力とその要素とその矛盾とにおいて半ば理解し予感した」といったが、サン・シモンこそは最初の、彼の時代としては最も重要な寄与をなした。サン・シモンにとって、人類が陥っている「青春期危機」とは、現在の制度に代って「産業制度」が到来すべきことを意味した。われわれはこれを次のようにいい表わすことができよう。本質的に異なり、相互に相争う二つの秩序、国家の強制秩序と社会の自

業奨励に努める場合でさえ有害である。」 「統治」そのものの克服だけが、社会が陥っている「極度の混乱」から、「本質上産業的」であるのにその政府の方は「本質上封建的」である国民の現状から、二つの階級、すなわち「命令する階級と服従する階級」（サン・シモン主義者のバザールは一八二九年師の死後間もなく一層辛らつに「二つの階級、搾取者と被搾取者」と表現した）への分裂から、社会を救い出すことができる。現代は、ある種の制度から他の種の制度へではなく、偽の秩序から真の秩序、すなわちそこでは「労働があらゆる徳の源泉となり」また「国家が労働者の協同組合となる」（サン・シモン主義者たちの定式）ような秩序への過渡期である。これは個々の国民の問題ではありえない。他国民に攻撃されるであろうからである。全ヨーロッパにわたって「産業制度」が確立され、ブルジョアの形態として存続する封建制度が廃止されなければならない。サン・シモンはこれを「ヨーロッパ主義」と呼んでいる。しかし彼は、これによって、指導と被指導との関係の変改だけが考えられるのではなく、むしろ変改は社会の内部構造全体に行きわたらなければならないことをよく理解している。産業制度が「成熟」する、すなわち社会がそれに熟する時期は、次の基本的条件によって十分正確に確定することができる。すなわち大多数の国民において、人々が多かれ少かれ多くの産業的組合に加入しており、またそれら組合が産業上の関係によって二つなり三つなり、あるいはその他いくつかが相互に結合しているという条件である。そしてこれこそは、人々がそれら組合

発的秩序とへの社会全体の分裂は、統一的な構造にとって代えらるべきである。社会はこれまで「統治」の下にあったが、いまや「管理」の下に移さるべきである。そして管理は、統治のように社会に対立し、かつ「法律家」や軍人から成るところの階層に委ねらるべきではなく、社会の自然的指導者たる生産の指導者に委ねらるべきである。もはや歴史上の諸変革において行われたように、統治者の一群が他の統治者群によって押しつけられるべきではない。警察上の必要から残されるものは、従来の意味でのいかなる統治の前提でもない。「生産者は、どれかの寄生者階級の代りにどれか他の寄生者階級によって掠奪されることに何らの価値をおかさない。……闘いは、それが一方の全寄生者群と他方の生産者大衆との間で、後者が前者の餌食であることをつづけるか、それとも社会の最高管理をその手中に収めるかを決定するために行われることによって、終局を結ばなければならないことは明らかである。」企業家をして指導者たらしめるようにというサン・シモンの「労働者諸君」への素朴な要求、資本家のうちの活動的な分子とプロレタリアートとを一つの階級に接合しようとする要求は、その現実離れな点にもかかわらず、社会機能そのものの指導以外のいかなる指導も必要ではなく、政治は事実上サン・シモンの定義でいう「生産の科学」すなわち生産に最も有利な前提条件に関する科学となるといふ、将来秩序についての思想を含んでいる。政府は本質上この種の政治を行うことはできない。「政府は産業の事柄に容喙するときはつねに産業に害を与える。さらに政府は産

を大きな共通の産業目標に向って運営し、各組合は時々の機能に応じておのずからこの目標に向って調整されることにより、一般的制度を建設することを可能にするのである。ここでサン・シモンは社会の構造的更新の考えに非常に近づいている。かれに欠けているのは、この構造的更新を可能ならしめる真の有機的社会単位についての構想である。「産業的組合」の概念はここで要求されるものを与えはしない。サン・シモンは社会の改築にとって、小さな社会単位のもつ意義を感じてはいたが、知ってはいなかった。

フリーエにとっては、まさにこの社会単位がすべてである。かれは自分が「組合の秘密」を発見したと信じ、そして組合のうちに「利害的結合の秘密」を見た。——この定式は、サン・シモンがその「産業制度」に最後の定式を与えたのと同じ時期すなわち一八二〇年頃にはじまっている。——シャルル・ザードが正当に指摘しているように、フリーエはここで、結社の権利を否認し労働組合を禁止したフランス革命の遺産に反対している。しかもその反対は、旧来の団体の枠が崩壊したことから自由競争の「無政府的」原理が生じたという理由からであり、この原理たるや、フリーエの最も重要な弟子であるコンシデランが一八四三年にその社会主義原則に関する宣言(共産党宣言はこれから影響を受けたと見られる)で予言したように、それを採り入れたときの目的とは全く反対のもの、すなわち「すべての産業部門における大規模な独占の普遍的組織」に終らざるをえなかったからである。フリーエがこの原理に反対して立てた

のは、「生産および消費の地盤における共同体的組合」(これも一八四八年コンシデランの表現による)であり、したがって生産と消費との結合に基づく自治体的社会単位の建設である。それは「社会的な蜂の巣の穴のような要素」と見られる農村コミュニティの新しい形態である。これもまたフリーエ自身ではなく、オウエン(フリーエはオウエンを読もうとしなかったが)に影響された彼の流派のうちにはじめて見出される考えである。一八四八年にこう語られている。ただ自由かつ自発的な組合のみが「将来の重大な組織問題」すなわち新しい秩序、ここでは個人主義が自発的に集団主義(原文のまま)と結合するのであるところの秩序を組織するという問題を解決することができるであろう。」ただこの方法のみ「歴史の第三の、そして最後の解放的進化」が、第一の進化が奴隷から農奴を、第二の進化が農奴から賃銀労働者をつくり出した(私たちはこの考えを一八二九年すでにバザールに見出す)のについて、「プロレタリアートの廃絶、賃銀労働者の組合構成員への変化」を成就すべき進化が行われるであろう。しかしひとは、フリーエ自身の体系の説明や計画案のうちに、彼の原理の具体的実現をさがしても徒勞である。彼の「ファランステール」(共同住宅)は大きなホテルにくらべられたし、またそれは実際にも、現代漸くはじまった、需要の可能な大部分を自己の生産で充たしているようなホテルと多くの類似点を示している。——ただそこでは生産が客自身によって営まれ、ホテルの部屋の揭示で私たちが知るような最小限度の注意書きの代りに、原則的には自由

な決定に任せられてはいるが、様々の奨励策を備えた、余すところなく正確な規則が日常生活のあらゆる詳細にわたって規定しているのである。最高級審たる大審院アレキサンダーは命令はせずただ指示を与えるだけであって各集団は「自己の意志に従って」行動するのであるが、しかし集団の意志は、「大審院の意志に違反することはできない。なぜなら大審院の意志は世論の力であるから。」こうした規則のうちの多くはわれわれに極めて異様に見えるが、しかしそのなかには重要な実のり多い洞察もいくつもあり、たとえば様々な仕事の交替ということもその一つであって、そこにはクロポトキンの「時間的分業」の思想がすでに示されている。他方、まさにこの点から見ると、ファランステールは最高度に非社会主義的な施設である。貧しいルカスの夏の日々の分業は彼を厩から園庭へ、園庭から草刈り、野菜作り、製造所等々へとつれて行く。一方富めるモンドルの夏の日々の分業は彼を「産業パレード」から狩へ、狩から魚捕り、図書館、温室等々へつれて行くのである。しかし貧しい人びとも、「富める人びとが幸福であるように等級づけられた富裕を享受」しなければならぬとか、あるいは「富の極度の不平等」によってのみ人びとは「この美しい高潔心の合意」に、すなわち富者たちが労働と才能のために分前の大部分を放棄するに至るとかを読むとき、ひとは、機械主義的幻想の刻印を帯びたこれらの社会単位が、新しい正しい秩序の細胞たろうとする要求を不当に出していることに気づくのである。だがそれらは、その画一性の故に——外見上のあらゆる内部的豊かさにもかかわ

らず一つ一つが同様の図式、同様の機構をなしている——社会の構造的更新に全く不適切である。宇宙と社会とを含むフリーエの「普遍的調和」は、社会における単位間の調和（たとえ多くの人びとは確かに「ファランジュの連合」を考へるにしても）ではなく、いっしょに生活する個々人の間の調和のみを意味する。単位間の関連は彼の体系にいかなる場所をも占めていないし、各単位はそれ自体一つの世界であり、また常に同一の世界なのである。しかし世界全体を支配する引力については、単位間についてと同様に、われわれは何も聞くことができない。それら単位は団結を、すなわちより高次の単位を結成しないし、しかもそれは全く不可能である。なぜならばそれら単位は個々人のように多様ではなく、相互に補うこともなく、したがってまた調和を形成しえないからである。フリーエの思想は協同組合運動とその事業、とくに消費組合運動に力強い刺戟を与えたけれども、「ユートピア社会主義」の建設的思想は、彼の思想を克服することによってのみ、それを自己のうちに採りいれることができた。

フリーエの著『家庭的・農業組合論』は一八二二年に、サン・シモンの『産業制度』は一八二一年および一八二二年に出た。一八二一年に出たオウエンの『ラナーク州への報告』は一八二〇年付であり、彼の「計画」の円熟した説明であった。しかし、フリーエの体系をすでに簡潔に含んでいるその『四つの運動と一般の運命の理論』はすでに一八〇八年に出ているし、サン・シモンの『ヨーロッパ社会の再組織について』は一八一四年に、オウエンの計画の理論

的基礎をなすその『新社会観』は一八一三年および一八一四年に出た。さらに時代をさかのぼるならば、われわれは、十九世紀がはじまったすぐ後に、さし迫る人類の危機を早くも告げるサン・シモンの処女作(『シネキヅ』)とフリーエの教説の最初の素描と見てしかるべき一般の調和に関する論文とに出会うことになる。だがわれわれはまた同じ頃にオウエンが、模範的な社会施設を建設していたニュー・ラナークで、綿紡績業の指導者として全く実際の活動に従事しているのを見出すのである。オウエンの教説は、サン・シモンやフリーエの場合とは全くちがってこうした実際から、実験と経験とから生れたのである。オウエンがフリーエの理論を多少知っていたにせよいなかったにせよ、彼の教説は、思想的にはフリーエの理論にたいする解答であり、問題の思弁的解決に對置される經驗的解決である。ここでは、それから新たに社会を建設すべき社会単位を有機的なものとして特徴づけることができよう。それは、教的に制限されたところの、農業を基礎として建設された共同体であり、そして「労働、消費および所有の結合ならびに平等な権利の原則」によって運営され、またそこではすべての成員が、「相互的かつ共同的な利害」をもつべきである。ここですでにわれわれは、いかにオウエンが、フリーエとはちがって、必然的かつ排他的な共有ではなく、むしろ財産の結合および協同組合化の形態を、同様に必ずしも消費の平等ではなくてむしろ権利と機會の平等を原則とするという、真の共同社会の簡明な前提にまで進んでいるかを知るのである。「共同社会的な生活とは」とテ

ンニースは、「共同社会」すなわち人びとの「永続的な真の共同生活」の歴史的形態について語っている、「相互的な所有と享受、共有財産の所有と享受」である。別の言葉でいえば、それは共同の家計であって、そこでは個人的所有が共同の所有と並存することができる。しかし共同経済(フリーエの図式とは全く異なるが)を建設することによって個人的所有は狭く制限されるし、また相互性すなわち最も広い意味での相互的な援助と協働、相互的なギヴ・アンド・テイクの結果として、上に「相互的な所有と享受」すなわち成員相互の相応した協力とよんだものが成立するのである。まさにこの考えこそはオウエンの計画の基礎をなすものである。(後にはさらに進んで「財産の共同および協同組合的結合」をも彼の計画した移住地(コロニー)の最も基礎の原則に数えている。)彼の計画を実現するためには、大々的な教育活動が必要であることをオウエンは見のがしてはいない。「人びとはこれまで、自分を守りあるいは他の人びとを滅ぼすためのほかには、共同で活動することを可能ならしめる原則によって訓練されて来はしなかった。しかしいまや同様に強力な必要が人びとをして、創造し保持するため、いっしょになって活動するように訓練されることをよぎなくするであろう。」オウエンは結局それが全社会秩序を、特別にはまた支配者と被支配者との間の関係を変えざる問題であることを知っていた。「統治する人びとの利害は、かれらが統治を加える人びとの利害とはつねに對立するように見えたし、また現在の制度の下ではつねにそう見えるであろう。」このことは、「人間が個別化さ

れたままである間は」すなわち社会が個々人の間の真の關係から構成されない間は、いまの状態が続かざるをえない。変化は、社会全体にわたって行われる前に、計画された共同体的農村の一つ一つにおいて成就されるであろう。個々の農村を治める委員会が「統治される各個人に對立せずしてむしろ緊密に結びついているところの恒久かつ老練な地域の統治を構成する」であろう。なお、オウエンが「新しい施設と国の政府および旧社会との關係」と呼んだところのものについての問題がまず残っている。しかしこの、「旧社会」という呼び方からしてすでにオウエンが、新しい社会は古い社会のさ中から成長し、それを内部から更新するものと考えていることは明らかである。その際新しい社会の様々な発展段階が必然的に並び存しなければならぬであろう。これについての特質的な一例が一八三五年に創立され、その後間もなくこの意味で通用されはじめた名称の「社会主義者」を称した「万国全階級協会」(Association of All Classes of All Nations)の、オウエンに鼓吹された規約草案に示されている。この協会の三つの部のうち、下級の二つはたんに消費組合の機能をもち、それに対して、第三の最高の部は、「僧侶、法律家、軍人、買手および売手のいない」ただ年令のみによって差別のある、単一の生産者および消費者階級から成る友愛組合を建設すべきものとなっている。これはたしかにユートピアではあるが、しかしそれなくしてはいかなる「科学」も社会を更改することができないような特殊な種類のユートピアである。

サン・シモンからフリーエおよびオウエンに至る発展の線は、時間的連続にしたがってはいない。エンゲルスが社会主義の建設者たちと呼んだこれら三人は、ほぼ同じ時代に活躍したのである。それは同時代における発展といってもよいであろう。サン・シモンは、社会は二元的秩序から統一的秩序に移るべきであり、社会全体の指導は、政治的秩序が本質的に異なる特殊の層として優位におかれることなしに、社会的機能それ自体から行われるべきであると主張する。これにたいしてフリーエは、オウエンと同様に、そうしたことは、生産と消費との結合の上に建設される社会、すなわち生産と消費とが互に結び合わされる社会単位、したがっていよいよ広範囲に自給自足のために労働するところのより小さな共同社会から成る社会においてのみ可能であり、また許されることができると答える。フリーエの解答では、これら単位の一つ一つは、個人の所有および要求については現在の社会と同じような状態にあるが、ただ衝動と活動との合致によって矛盾から調和へ導かれるであろうといっている。それに反してオウエンの解答は社会の更改はその一つ一つの細胞ならびに全体の構造について遂行されなければならないこと、個々の単位の正しい秩序のみが正しい全体の秩序を確立しうることを語っている。これこそは社会主義の建設なのである。